

# 哲學研究

第十六號

第二卷  
第七冊

## 宗教の社會的表現に就いて

宇野圓空

一

宗教の社會的見解即ち宗教は本質的に公共的行事であり、社會的集團的現象であるといふ意見は、最近宗教心理學者や宗教社會學者の間に一の有力なる定説となつて來た。即ち第十九世紀以來教權主義に反抗する新教神學や、主知主義の反動として起つた浪漫的宗教哲學、及び此等の思想を基礎として居る宗教心理學は、宗教をば主として罪惡と救濟の經驗、心靈上の事實と見做し、従つてそれを全く個人精神の問題として取扱つたのであつたが、其後特に原始的宗教に關する歴史的人類學的研究が盛になり、且つ人類文化の社會心理學的説明が進歩した結果、近年は一般に宗教の

社會的方面が高調され、先の個人的見解に反動して、一面には新教思想に反對するカトリック主義を復活し、宗教をば専ら社會的集團事實として説明し、其社會的效果と團體的活動を尊重するやうになつて來た。先きにジエデンスは宗教をば一の社會的體制として認め、ヴェントも亦それが民族的意識の產物であつて、公共的性質と團體的組織とを有すべきことを説いたが、マレットに至つては宗教が一の社會的觀念として、社會心理學的に説明すべきものであることを主張し、殊にデュルケイム一派の社會學者は宗教意識をば全く一の集合意識と見做し、それが必然に集團的行事であり團體的組織でなければならぬことを力説したのである。而して亞米利加に於ても之れと同時にキック、エームズ、ロイス等が宗教は社會的價値の自覺であり社會意識の產物であつて、社會的生活の一機能に外ならぬことを説いたが、最近コイト (Coit, *The Soul of America: A Constructive Essay in the Sociology of Religion*. 1914) ー (Coe, *The Psychology of Religion*. 1916) 等は之等の意見を採用して、宗教をば全然社會的集團的現象と見做し、専ら之を社會意識として説明せんとして居るのである。

それで若し此等の社會論の主張が單に宗教は社會人心の統一に効果があるとか、宗教的觀念や行事は社會的傳承習慣に淵源し集合的に發生するとか、又宗教は多く

社會的利害を動機として起り公共的儀禮として現はれると云ふに在るならば、それは宗教史の事實の人類學的社會學的説明として當然の歸結であつて、恐らく何人も之れに異論を挟む餘地はあるまい。然ながら若しそれが一部の學者の説くやうに、宗教は本質的に社會的價値を尊重する社會的機能の一部であつて、従つてそれは常に社會的行事と集團的生活としてより外に存在しないといふ主張であるならば、吾人は直ちに之れに賛同することは出来ない。何となれば宗教は學術、道德、其他の文化現象と同様に事實上一の社會文明であつて、其發生と發達は社會的集合的に喚起せられ、これに種々なる社會的效果を有することは勿論、歴史的には多く公共的行事であり、且つ團體的組織を伴つては居るが、しかもそれは本質的に必ずしも社會的生活ではなくして、單なる個人的意識個人的行爲として現はれる場合が多く、一般的にはむしろ之を個人的生活の事實として理解した方が適當と思はれる。然し此點については『宗教研究』に寄せた拙稿に於て多少之を詳説して置いたから、こゝには再び之を論じない。

そこで彼宗教社會論に對してかくの如き個人的見解を主張するには、先づ歴史上幾多の個人的生活としての宗教が存在し、宗教は常に必ずしも社會的行事や集團的

組織として現はれないことを、事實に就いて證明することも一の方法である。現に宗教社會論者殊にデュルケイムに對する批評は、多くは此點から其社會的見解の當を得ないことを攻撃して居るのであつて、或は教祖の獨創的宗教經驗を擧げ、或は孤獨的生活に於ける神秘的經驗を説き、或は近代の個人的宗教觀念を指摘して、宗教が常に悉く社會的集團的現象でないことを説明せんとして居る (Wallis, Durkheim's View of Religion. Amer. Journ. of Religions Psy. vol.7. 1914. pp.; 252-267; Webb, Group Theory of Religion and the Religion of the Individual; Goldenweiser, Religion and Society. Journ. of Phil. Psy. & Scientific Method. vol. 24. 1917. pp. 113-124) 然しながら若し單に事實についてののみ論ずるならば、所謂個人的宗教の存在と同時に、社會的宗教の存在も亦否定すべからざる事實であつて、歴史的にはむしろ宗教が全然個人的な經驗又は行爲として存在する場合は極めて少く、却つて社會的協同的生活として現はれた宗教の方が遙かに多いかも知れない。従つて宗教をば全然個人的生活として見るべきか、將また社會的現象として取扱つた方が適當であるかは尙ほ問題である。加之社會論者の考へによれば個人的生活としての宗教は、社會的宗教の原理を以て説明し得べく、又説明すべきものである。即ちデュルケイムは原始的社會に於ける個人的トテミズムや又近代の個人的

信仰は、部族的トテミズムの變態であり又教會の統一的信仰の一方面と見做して居るが、又コーによれば神秘家の愛、合一等の宗教的經驗は人間の社會的慾求が理想的存在としての神に集中されたものであり、近代宗教に於ける個人意識は實は社會意識の反面に過ぎないのである。それで若し此等の説明が事實の真相を得たものであるとすれば、個人的見解よりはむしろ社會論の方が宗教の一般的説明として其當を得たものであるかも知れない。

固より社會的宗教に立脚する此等の説明は容易に之を首肯することが出来ないが、何れにしても單に事實として個人的宗教の存在を指摘するのみでは、直ちに宗教の社會的見解を破することは困難であつて、若し眞に宗教が本質上個人的活動であることを主張せんとするには、むしろ事實として社會的宗教の存在を認めつゝ、しかもそれが根本的に個人的のものであること、換言すれば宗教は、それが社會的生活として現はれると否とに關らず、すでに個人的生活として概念上完全に宗教であることを明かにしなければならぬ。而して之れが爲めには或はエップの如く先天的に宗教の根本概念が個人性に獨特なる神との關係の意識であつて、且つ普遍性を意味する社會よりは個人性の方が具體的現實的な存在であることを明かにし、或はヨリス

の如く個人が其自身に完全な實體として基礎的單位であるに對して、社會をば其複合的實體として認めることも重要な論點であるが、之と同時に更らに進んで概念上基礎的單位として認めた個人的生活に於ける宗教から、其複合體である社會的宗教の事實を説明することも、亦宗教の個人的見解を妥當ならしむるに必須の順序である。即ち宗教は本質的には單なる個人的生活として完全に宗教たり得べく、それが協同的行事や團體的組織として社會的生活とならないでも宗教たるに少しも缺くる所はないのであるが、しかも事實上にはそれが屢々或は殆んど常に集合的意識及び行爲として現はれ社會的組織を成して居るのは、如何なる原因に基き如何なる過程によるのであるか。之を適當に説明しなければ、宗教の個人的見解は未だ徹底したものと云はれない。それで私はこゝに本來個人的生活として假定した宗教が、社會的に表現する原因、條件及び其形式の概要を指摘せんとするのであるが、然しそれは決して周到なる考察と研究の結果ではなく、又之れに關する重要な學說や例證を引く暇も有しなかつたのであるから、此點は豫め讀者の諒恕を乞はなければならぬ。

人は孤獨にして生れず、必ずや或る一定の社會の中に生長發育するのみならず、又内には生れながら集合的本能を有し、何等かの程度に於て社交性を具へて居るから、其生活の凡ての方面に於て他人と協同せんとする傾向が現はれ、人間一切の生活活動は自ら社會現象を成して居る。従つて宗教についても本來各個人の特有の慾望動機から、特殊の對象に對する各人獨特の態度、行爲は、其自身完全に宗教たり得るに關らず、其宗教的意識や行爲は人間の社會的本能と其精神上肉體上及び境遇の類似共通とに依つて、事實上には殆んど常に集合的觀念や協同的活動として現はれるのであつて、そこに所謂社會的宗教が生ずるのである。然らば此社會的宗教が發生し、宗教が社會的集合的組織として現はる原因は如何といふに、一般に人間が社會的生活を構成する原因及び條件は、客觀的には其精神上肉體上の類似の存在と其接近交通協同を可能ならしめる外部的の境遇機會と、及び主觀的には其集合、協同、團結の慾求と其類似の認識に基く相互的同類意識である。今之を宗教的生活について考へて見ても、それか社會的協同組織となる理由は全く同一であつて、宗教的個人はす

に本能的に集合團結の慾求を有し、且つ生得的に同一の人類として其宗教性の類似があるのみならず、そこに部族、國家等の社會組織があつてすでに他の方面の生活に於て幾多の協同團結を爲して居る以上、其類似は一層密接であり、其相互的認識と協同の機會は更らに多いのであるから、各個人の宗教的活動は必然に社會的に結合せざるを得ないのである。

然し特に宗教に於てそれが社會的結合を促進し支持する原因となるのは、其協同の必要であつて、各個人は必ずしも之を明瞭に意識して居るのではないが、しかも直接間接に此必要に刺戟されて、其協同の慾求は切實となるのである。凡そ人間の思想感情は全然個人的獨創に出るものは稀れであつて、其大部分は社會的傳承と暗示によつて之を得來るのであるが、更らに其獨創的の觀念と雖も其確實性と信念とは社會的權威の承認によりて支持せられ保證せられ、又其感情は社會的同情によつて交感的に昇進する。又實際的生活に於ても人間の活動は各人が個々別々に之を營むよりは、協同的に之に従事する時に其活動力は相互的に激勵され増進して、個人的生活に於ては見られない様な効果が現はれる。即ち宗教的生活に於ける社會的協同の效果と必要とはこゝに在るのであつて、個人の宗教的信念は類似の信念を有す



る人々の承認と同情に依つて、益々強固になり且つ其内容を充實し、其行爲は相協同して之を助成し策勵するものゝ存在によつて、愈々發展し活躍するのである。之に反して個人の信念が如何に強固であり、又其活動力が如何に盛んであつても、若しそれが純粹個人的の生活として營まれ、何等之を承認し助成する周圍の人々がなかつたならば、たとひ積極的に之を批難し妨害するものが無くとも、それは漸次に其力を失つて消滅する外ないのである。之れ即ち宗教的生活を支持し促進するに、社會的協同の必要なる理由であつて、デュルケイムが神聖觀念は集團的生活に於てのみ喚起せられ、其他の場合に於ては人は世俗的な生活を爲すのであるから、宗教的生活は社會的生活の外には存在しないと云つたのも、要するに此事實を力説したものである。勿論事實に於て宗教的意識は超現實的のものとして、現實の社會を離れて孤獨の中に特に著しく喚起されることはあるが、然しそれは全然社會的協同なくしては永續的に保たれないのであつて、何等かの形に於て其協同者を要求するのである。況して他に反對者や妨害者のある場合に於ては、其宗教的類似を有する者の間に於ける協同の必要は最も切實に意識せられるのであつて、時としては唯反對せんが爲めに團結するが如き觀を成し、所謂宗教派心の一面を極端に表はし來るのである。

加之宗教に於ては他の生活に於けるよりも比較的各人の類似が現はれ易い傾向がある。蓋し宗教は學問や藝術に於けるやうに個人的獨創を貴ばないから其信念や行法は多く社會的傳承や習慣として與へられたる儘を踏襲することが多いのであつて、従つて又同一の社會に生存する個人の間には其宗教性の類似が著しくなるのである。故に原始的な社會に於て各人の宗教的慾望、對象行法が殆んど全く共通であるのは云ふまでもなく、稍々個人的自覺の生じた社會に於ても、宗教に於ける權威尊重の傾向は容易に個人をして其傳承と習慣から分離することを許さない。之れ即ち宗教が常に部族的又は國民的統一の中心要素となる一原因であつて、更らに個人性の發達と共に個人的獨創の宗教が起つた後にも、それは或は先賢古聖に其權威を求め、或は理想的存在に其源を歸して、それを中心として相類似するものゝ結合を計らんとするのである。かくして宗教的生活に於て人は常に他人の類似を發見せんとし、又相互に相類似せんと努めて居るのであつて、従つて同一社會又は團體に於ける個人の宗教性は、他の生活に於けるよりも比較的多くの同質性を保ち、従つて又其團結も強固なのである。固より宗教は人間の最高價值或は根本生命の問題であるだけに、其等個人の間存する差異は著しく相互の注意を引き、僅少なる差

異が原因となつて互ひに反撥し、分派分裂の傾向を生ずることも甚しいのであるが然し此事實は他の一面に於て又小なる範圍の團結の固いことを意味するのであつて、其範圍内の相互の類似は一層密接に保たれるのである。故に同一社會に於ける個人の自然的類似は、他の生活よりも宗教に於て殊に著しいのみならず、特殊の宗教的團體に於ける個人は、他の團體に於けるよりも比較的に其同質性を保つことが多いと云ふことが出来る。これ即ち宗教の社會的協同を發生し支持する基礎的條件であつて、又宗教的團結が他の社會的團結に比して其統一の強固なる所以である。

### 三

かくして宗教的生活の社會的協同は、各個人の宗教的類似の程度と、其協同の慾求又は必要如何によりて種々なる形式に於て現はれるのであつて、或は特殊の慾望や行事の爲めに一時的に集合することもあり、或は凡ての宗教的生活について永續的團結を成すこともあり、或は唯共通の利害目的に對して多少同情し聯合するに止まるものあり、或は全然同一の信念行法を以て強固なる團體組織を成すものもある。

それで此宗教的協同組織の形式に就ては、コトは其近著に於て宗教的團體を分つて、

756 宗教的群集 (religious crowd) と僧權的團體 (sacerdotal group) と及び自由團體 (deliberative

group) との三として居る (cf. cit. pp. 119-129)。而してこれは先に姉崎博士の宗教學概論に説かれた宗教的團體組織の三階段、即ち祭儀組織、成立組織、及び教團組織の區分と大體上同一の形式であるが、若し之れを主として其成立の原因から區別したならば、自然的に他の原因から成立した民族的社會としての宗教團體と、多少人爲的に特に宗教の爲めに成立した特殊の宗教團體との二として見ることが出来るだろう。

かくして先づ第一に個人の宗教的類似をして最も顯著ならしめ、且つこれに交通協同の機會と必要とを與へるものは、既成の協同組織としての民族的、地方的若くは政治的の社會であるから、最も多く宗教が協同的活動を營むべき地盤となる社會的團體は、即ち之等の民族的、地方的の社會に外ならない。即ち原始的の人民に取つては部族、氏族又は家族は其儘一個の宗教的團體であつて、其全然私的個人的な宗教生活の外は、此等の社會組織を基礎としてこゝに其宗教上の協同的活動を營むのである。而して實はかゝる原始的な未だ個人性の發達のない時期に於ては、彼等は其宗教的慾望、信念、行法をば全々其社會的傳承と習慣から得來るのであるから、其れが或る個人的な利害を動機として起る時ですら、其宗教的生活が純粹に個人的に營まれるこ

とは殆んどないのであつて、むしろ彼等の宗教的生活は悉く此等の社會の生活として、全然協同的に營まれると見ていゝのである。而して此れ等部族氏族の間に所謂國民的統一が生じ、何等かの形式の國家が發生してから後でも、宗教的協同組織としての家族の團結に變動のないことは云ふまでもないが、其部族や氏族としての宗教的生活も多少其性質の異つた國民的宗教に抑壓されつゝ、尙且つ地方的卿士的宗教として殘存し、郷土若くは氏子等の團結によつて、其共通的信念、行事と共同組織とを維持するのである。加之他の一方には之れと同時に部族的習慣傳承の代りに、國家的の制度法律の力に基く新なる宗教的協同組織が成立するのであつて、たとひ其内容の統一が部族的社會に於ける程完全でないにしても、とにかくこゝに亦更らに廣い範圍の宗教的社會組織が生ずるのである。要するに此等の部族、氏族、家族、國家、地方、郷土等は人種、土地、政治等を基礎とする社會的團結であつて、一方に於ては宗教以外の種々なる生活々動を營む協同組織であるが、しかも又それが同時に協同的宗教的生活を爲す點から見れば、明かに一個の宗教的社會組織であつて、他の特殊的宗教團體と共に亦廣義の宗教的社會と稱せらるべきものである。

尤も此等の民族的地方的社會は、人類の個人的自覺が進むに従つて、永く其成員の

宗教意識及び行爲の同質性を保持すること困難であつて、其内部に於て特に其宗教性の相類似した者のみが集る特殊の宗教團體が発生し、それが爲めに全體としての宗教的統一と活動を奪はれることがある。然し又一面から見ると民族的習慣と其感化力は、尙ほ其社會内部の個人に常に或る程度の宗教的類似を保持させて、容易に其分離を許さないものであつて、一方で特殊な宗教性とそれに基く特殊の宗教的團體の存在を認めつゝ、他の一方では此等個人に永く舊來の宗教若くは宗教的傾向を保存させ、或る程度まで其國民的又は地方的な宗教的團結を存續するのである。故にたとひ個人的自覺の勃興によつて新宗教が起り、或は外來の宗教が輸入されてそこに新なる團體宗派が生じ、從來の國民的地方的な宗教的團結が分解され、縦斷されても、其等の宗教の中には常に幾多の民族的特性が保留されるのである。而して多くは其等の新宗教や外來の宗教の方が、却つて其當初の主義や信念を保持することが出來ず、其本來の内容と形式を徹底的に普及するに困難を感じて、動もすればその民族的宗教の一部を攝取したり之に同化して、そこに再び國民的又は地方的な特殊の團結又は分派を發生するにいたる。これ實に民族的宗教性の偉大なる潜勢力を示すものであつて、此影響は各國に於ける新宗教の變化と所謂世界的宗教の傳播の

歴史の上に常に明瞭なる事實として現はれて居る。

#### 四

宗教的協同組織の第二の形式は特に宗教其自身の爲めに成立する特殊的團體組織であるが、此種の團體は多少人間の個人的自覺が發達し、自然的な民族的社會に於ける個人の宗教的差異が著しくなつてから後に發生するのである。一般に人類の協同生活の形式は最初は唯單純なる一種の社會組織であつて、常に人種的關係を基礎としてそこに生活々動の諸有方面を結合して居るが、其社會が發達して其範圍が廣くなると、其中には階段的に幾多の小區分が生ずる。而して之れと同時に文化が發達して生活内容が複雑になり、又之れに應じて個人的差異が著しくなつて來ると、一切の生活を單純なる一系統の社會組織によつて營むことは困難であり、全體の個人を一様に協同させることは不可能となるから、こゝに社會生活の各方面を統一すべし所謂統合的社會 *integral society* の内に於て、生活機能の特殊の方面を營み、又それらの特殊的類似によりて團結する所の種々なる階級や團體即ち特殊目的の團體若くは機能的團體を發生するのである。即ち宗教も其發達が幼稚な間は部族、氏族等

の民族的社會に於て協同的に營まれて居るが、其民族的社會の範圍が擴大し其生活内容が豊富になると、特に宗教的生活の協同に對して自ら別個の團體的組織が要求され、且つ宗教其自身も發達して其個人的差異が著しくなるに従つて、そこに特に宗教的類似を基礎として宗教的協同其自身を目的とする所の特殊宗教團體の發生を見るのである。

而して此種の宗教團體は早くすでに部族的社會の中にも其發生を見られるのであつて、特別の宗教的慾望や信念を有し、特殊の行事をなさんとする一部の個人が集つて、小團體を形くるとは決して絶無ではない。又同しトテムを奉ずるものゝ中では或は特に熱情を有し危機に臨んだ者が一種の團結を成し、或は長老、祭司、咒師等の特殊的地位又は資格を有するものゝ間に組合等の成立することは事實である。然しかゝる特殊的團體の組織と團結とが明白になりそれが外部に對して多少團體としての意義を有するのは、民族的社會の範圍が擴大し、又其自身に宗教的團結と機能とを完全に遂行し得ないやうになつてからのことであつて、殊にそれが宗教的生活の上に民族的團體よりも有力なものとなるものは、所謂個人的創唱宗教が起つて後のことである。固より創唱宗教なるものは其形式が如何に獨創的のもので、實質



に於て多く在來の民族的傳承と隔絶したものでなく、從つて其教祖の周圍に生ずる宗教的團體も全く原始的社會に於ける組織のない小團體と根本的に異つたものではない。然しながら一方に於て或る教祖の個人的勢力によつて創唱された宗教は、常に其成立の當初から其民族又は國民の一般的信念や行法に反對し、少くとも之等と區別すべき大なる特徴を有するものであるから、一般の國民に對して其主義を維持するが爲めには、その教祖の人格、教説又は行法を中心とする特殊の團體を有することが必要である。加之たとひ理想として之を國民全體に與へるにしても、從來の宗教を内容とするやうな民族的團結は之を無意義のものとして排斥するのであり、且つ多くの場合には宗教に於ける民族的境界を全く無用のものとして打破し自ら他民族の範圍にも擴大せんとする普偏主義を以て現はれるのである。故に若しかゝる創唱宗教に屬する特殊團體が勢力を得るならば、少くとも宗教上には民族的協同組織は全く其意義を失ふのであつて、宗教的協同組織としてはかゝる特殊團體が其位地に代はり、動もすればそれは宗教上のみならず、軍事的政治的勢力や組織をも有する獨立團體として、他の民族的社會と拮抗するに至るのである。これ所謂宗派若くは教會なるものゝ發生である。

かくして一の國家又は其他の民族的社會の内に、主義内容を異にする種々の宗教的團體が發生する時、之れに對して其民族的若くは統合的社會は之等を統一せんとし、或は其等の團體の融和合一を畫策し、或は其中の一を助成して社會全體の宗教となし、他を排斥せんと試みるかも知れない。而して若し其統一運動が成效したならば、其社會と特殊の宗教團體とは其範圍に於て一致し、事實上宗教的協同は復たその民族的團體によつて支持され、所謂國教制度等の場合となるのである。然しながら既に此時期に於ては、一社會の内部に於ける諸宗教及其團體の統一といふことは事實上甚だ困難であつて、民族的精神の同化力も強烈ではあるが、しかも人間宗教性の發達は自ら種々なる宗教の形式及び之に伴ふ宗教的團體の分化を促進して止まないものである。加之かく宗教の協同的活動が民族的社會と殆んど何等の關係を有せないやうになると、其特殊の宗教的團體は一方に於て屢々民族的政治的境えて他の國家社會にも其勢力を擴めるのであつて、それは一の國家社會の全部を包括し得ない代りに、幾多の國家社會にも亘りて其統一と協同を保持し、時としては數個の國家社會の上に立つて、之等を連合し統一する所の最高權威となるのである。即ち盛時の羅馬教會が歐洲各國に對する關係は之れに外ならないが、之に於て特殊宗教團

體はカトリック即ち世界的教會の觀念を實現し、同時に其『目的の爲めの團體』としての性質を徹底させるのである。

然し又民族的の宗教的協同組織の中に、幾多の特殊的團體が発生して相對立すると同様に、特殊宗教團體も亦其範圍が擴大する時は、屢々其中に特殊的類似によつて團結し特殊の目的の爲めに結合する所の小團體を分化することが少くない。即ち個人性の發達と共に益々發展し分化する各人の宗教的要求は到底之を單一なる信念、行事によつて包括し統一することは不可能であつて、本來宗教性の特殊的類似に基いて成立した特殊的團體も、其内容が充實し範圍が擴大するに従つて、亦其内部に於て特殊的要求を満足さすべく異計分派を生じ、そこに嚴密なる意味の宗派 *sect or denomination* が成立する。而して其等は其宗教的行法、理想其他の信念の異なるに従つて相分合し、分派に分派を累ねるのであつて、所謂宗教的組合即ち講社 *order* の類は多くは其最も特殊的な小範圍のものとなつて居る。固より之等の小團體に對して其根本精神又は外形の上から大體上之を統一する協同的組織も存在するのであつて、現に基督教と云ひ佛教といふ名の下に多數の宗派や教會が多少統一的組織を成して居るのは事實である。然し其内容をば全然同質的に渾然融和せしむることは到

底不可能であつて、其内部には幾多の團體が重複錯綜して存在し、其宗教性の差異については云ふまでもなく、單なる歴史の由來にまで重大なる意義を認めて相對立して居ることは、類似と差異との相互關係に基く *social integration* の傾向として蓋し當然の現象であらう。

## 五

宗教の社會的表現には上に述べたやうな個人的宗教の社會的協同的活動の外に、尙ほ社會が自ら主體となつて活動する所の社會其自身の宗教があるのであつて、其は單なる個人的宗教の社會的協同とは區別しなければならぬ。即ち上に述べたやうな宗教の社會的活動は其實は唯個人的宗教の社會的協同であつて、未だ社會其自身の宗教的活動ではない。故に之等の宗教的協同に於ては、如何に各人の宗教性が密接に類似して居り、従つて又其協同團結が固く、或は家族、部族、國家等の民族的社會が擧つて之れに従事し、或は之れが爲めに教會宗派其他の特殊的團體が組織せられ、其等の會員が相集りて同一信念の下に同一の行事を行つてもそれは各人がその個人的理想慾望に基いて、其宗教的經驗活動を社會的協同的に營んで居るに過ぎない。

之れに反して嚴密なる意味の社會的宗教即ち或る社會團體其自身の宗教的生活とは、唯個人の宗教的活動の集合や協同ではなくして、一の社會團體が其自身の利害を動機として、或る宗教的對象に對して意識し實行する所の宗教的經驗若くは態度を云ふのである。之れ恰かも社會の毀譽褒貶といふ時、各個人が自己に對する恩怨の爲めに、或る人に對して加へる所の感謝又は攻撃の集合や、或は協同して之を稱讚し批難することの外に、尙ほ社會全體が全體に對する功過に對して、社會の名に於て又社會の機關を通じて與ふる所の表旌刑罰があると同様である。而して之等社會國家の賞罰は事實上之を實行する者は一部少數の個人であつても、しかもそれが社會の意志を奉じ社會を代表して爲す點に於て、決して私的個人的の毀譽ではない如く、宗教に於ても社會の宗教即ち部族、國家、乃至家族の宗教は、たとひ其信念を意識し行事を修するものが一人若くは數人の個人であつても、それが社會の利害を目的として、全體を代表し全體の名に於て爲されるならば、それは決して個人の私的宗教ではなくして、社會其自身の宗教だと云はなければならぬ。例令ばトテム神の信念の如きも、之を經驗し意識するものは固より各個人であるが、それは大體上或る氏族又は部族の全員が各個人よりは全體と血縁あるもの、社會全體の運命に關するものとし

て尊崇するのであるから、要するにその全體の個人の信念は集合的に社會其自身の信念と云ふことが出来る。又戰捷の祈禱に従事するものがたとひ祭司の階級に限られ或は君主一人が之を行ふとしても、それは國家の利害の爲めに國家を代表して修する祈禱であるから、亦之を以て國家其自身の宗教的活動と云はなければならぬ。

要するに社會其自身の宗教といつても、實は個人の集合の外に社會は存在しないのであるから、其信念を意識し行事を營む實際上の主體は一部又は全部の個人に外ならないが、唯それが社會の慾求、利益、又は理想を基礎として、集合的に一個の全體として意識し實行せられる點に於て、單なる個人的宗教の集合や協同とは異なるのである。故に此意味に於ての社會的宗教の成立する條件としては、第一に其宗教的慾望理想の内容が個人的慾望でなくして、社會全體の利害に關係し、而も之を一個の慾望として考へた社會的慾望でなければならぬ。即ちそれは單に個人の利害として考へられた病氣平癒、來世安穩、若くは道德的向上等ではなくして、社會全體に關係し且つ全體として一個の利害問題を成す所の戰捷、豐饒、疫癘退散、天災鎮靜等の慾望でなければならぬ。従つて又社會的宗教に於ける宗教的對象の價值は必ず社會的價值たることを要するから、其對象として認められるものは常に社會全體に幸し若くは

災ひする氏神、護國神、疫神、風雨神等である。それで若し之に反して宗教的慾望の内容及び對象の價值が單に個人の利害に關係するものとして考へられた時は、たとひ各人が同一の慾望を以て同一の對象に對して、同時に同一の儀禮を修しても、それは唯個人的宗教の集合に過ぎないのであつて、全體として一の社會的宗教とはならな  
 5。

固より所謂社會的利害なるものも實質上は多數個人の利害に外ならないのであるから、人がそれを單に自己にのみ關係するものとし、自己の上にものみ顧みる時は、それは純粹の個人的利害となるのであつて、豊饒、疫病等は時としては單なる個人的慾望の目的であり、氏神や國神も人によつては唯の個人的守護神となるのである。然し若し之等の價值や利害も之を社會の全體又は多數に關係するものとして、且つ之を社會的利害として統一的に意識する時には、それは即ち社會的價值となつて現はれるのであつて、こゝに所謂社會的利害とは即ち多數の個人でなく一個全體としての社會に統一的に關係せしめた利害の觀念に外ならない。この意味に於て社會的利害は事實上必ずしも社會の全部又は多數の個人に關するものでなくとも、差支ないのであつて、直接にはある少數又は唯一の個人に關係する利害でも、若しそれが全

體として考へられた社會に關係するものとして考へられる時は、それは亦一の社會的利害である。例令ば君主、家長其他團體の代表者や有力者の利害は多くの場合皆社會的利害となるものであつて、従つて君主の病氣平癒を祈るが如きは此點に於ては社會的宗教をなして居るのである。

社會的宗教成立の第二の條件は社會の全部が直接間接に同一の理想信念を意識し、同一の行事を行ふことである。即ちたとひ其理想や慾望が社會的のものであつても、又其對象が社會的價值を有するものであつても、若し之を意識し實行するものが一部分の個人であるならば、それは結局社會の爲めにする個人の宗教であつて社會の宗教ではない。例令へば一農夫が村の爲めに豊饒を祈るとすれば、それは唯彼一人の利益の爲めではないが、しかも尙彼一人の利他的宗教といふのみであつて、村の宗教ではない。同様にして豫言者が國民の救濟を祈つても、又家人の一人が私かに家運の長久を願つても、皆これ國の爲め家の爲めにする個人の宗教であつて、さらに又國民の多數が君主の病氣平癒を請ひ、幾多の寺院に於て戰捷の祈禱が行はれても、尙それは社會の宗教とは云はれない。故にそれが眞に社會の宗教である爲めには必ず社會の全員が何等かの形式に於て之を意識し、實行しなければならぬ。固よ



り事實上これを意識するものは必ずしも社會の全員ではなくして、一部少數の個人であることもある。殊に其行事を行ふものは少數の個人、或は時として唯一人であることもあるが、しかも此場合その少數の個人は何等かの形に於て社會全員を代表して居り直接之れに與らないものは此代表者によつて間接に其意志を實行して居るならば、それは實質に於て全員が與はつて居ると同様であつて、そこに社會の宗教は存在すると云はなければならぬ。此意味に於て國家的祭司の行ふ儀式や君主が國の爲めに身を以て祈るが如きは、それが適當に國民の意志を代表して居る以上、亦一の社會的宗教と見なければならぬ。何れにしても社會の宗教的活動には其全員若くは之を代表するに足るものが直接間接に之れに關與しなければならぬ。

然し尙ほ一つ社會的宗教成立の條件として、此等直接間接に之に關與する個人に於て統合の意識の存在が必要である。換言すれば、少くとも社會の全員を代表して直接それを意識し實行する人々は、其場合彼等は唯個々別々に同一の信念を抱き同一の行爲を爲すのではなくして、彼等の宗教的意識や態度は全體として一個の宗教的活動を成して居り之に對して彼等各自の經驗や行爲は單に其一部分を分擔するに過ぎないことを意識して居なければならぬ。故にたとひ直接此宗教的活動に與

かる人々の宗教的經驗や行爲が同時同處に行はれないでも、又其内容が全然同一でなくとも、それが相依つて一個の宗教的活動を成すものと考へられた場合には、それは全體として一の社會的宗教を成すものと云ふことが出来る。此意味に於て戸々別々に雨を祈り豊作を感謝しても、又各人に於て儀禮の相異つた部分を分擔しても、それは多くの場合に一の社會的宗教たり得るのである。之に反して若し此統合的に一體であるといふ意識がなかつたならば、たとひ社會の全員が同一の信念慾望を有し同一の行事を同時同處に行つても、それは唯各個人の宗教が多數に集合したに過ぎない。例令ば全國民が同時に君主の平癒を祈願しても、それが全體として統合的に一個の宗教を成すものとして行はれたのでなければ、それは唯各個人の祈りが社會の全體に互つて行はれたといふのみであつて、未だ一の國家の宗教とはならぬのである。而して此合同的統一的の社會的宗教が或る少數の代表者によつて經驗せられ實行せられる場合には、其他の人々は直接之に與らないから従つて亦此統合の意識をも有しないのを常とするが、然し此場合に於ても其代表者の方では、若し之を全員に周知せしめたら、やがて統合の意識をも生ずべきことを豫想して之に従事して居るのであるから、そこに又全員の統合の意志は間接に表現されて居るので

ある。故に事實上其統合の意識が全員に存すると又一部の代表者にのみ存するとに論なく、其實行はむしろ同時同處に集つて共同的儀禮となることが多く、時と處を隔て、其間に統合の意識が存在し、別々に其實行を見ることは極めて稀れである。之れ即ち社會的宗教が殆んど常に集團的儀禮となつて現はれる所以であつて、たとひ其主要部分は之を少數の代表者に委すにしても、其他の個人も何等かの地位を取つて之に參與し、其統合の意識のあること表示するのである。故に多くの社會的儀禮に於ては祭司や所役者の外に聽衆や傍觀者も亦重要なる意味を持つて居るのである。

## 六

かくの如くして一の社會的宗教が成立するのに、其成立の地盤として又この活動の主體として、普通には或る既成の社會團體の存在が豫想されて居る。蓋し社會的宗教の動機は或る社會的慾望理想であつて、それは社會全體の利害に關係すべきものであるから、かゝる利害の觀念や慾望は、其利害の及ぶべき社會團體がすでに何等かの形に於て存在しなければ生じ得ないのであつて、従つて亦之に基く社會的宗教

も存在しないのである。而して此意味に於て社會的宗教成立の地盤となり、又其活動の主體となるべき社會は、第一には家族、部族、國家、地方等の民族的社會である。固より家族や國家は時として其自身の社會的宗教を有しないことがあつて、動もすれば其内部に在る個人的宗教の協同運動すら之を家族又は國家の全體として現はさないことがある。特に地方的團體の如きはむしろかくの如き社會的宗教を有しない場合が屢々ある。然し一面から考察すると此等の民族的社會は皆一の所謂統合的社會として、個人生活の各方面の社會化に與るのであるから、若しそこに社會的宗教の動機たるべき重大なる社會的利害の問題が発生する時は、各個人の間は大體上信念の一致が存在する限り、そこに其自身の社會的宗教を發生する。而してたとひ平常無事の際から繼續的に社會的宗教活動を營まないまでも、ある社會的危機若くは重大なる社會的利害が生じた時には、一時的にもせよ其自身の社會的宗教的活動を生じ、又それに伴つて多少永續的に何等かの宗教的活動若くは態度を保持するやうになる。即ち近代的家庭に於ては各人が何等自己の宗教をも有せず、又祖先の祭祀其他何等か家族全體としての宗教をも有しないことは少くないが、しかも或は家族として特に紀念すべき時期が來り、或は病人が相次ぐなど家族的の大事が生ずるに至つ

て、動もすれば家族としての宗教的儀禮を行ひ、全員之れが爲に祈願する等の事實は屢々見る所である。又現今の我國の如き平常は表面上に何等國家の宗教なるものを有しないやうであるが、しかも戦争其他の國家的危機に會すると、國家の名に於て種々の宗教的祭儀が行はれる。同様にして都市團體の如きも多くは一定の社會的宗教を認めて居ないが、これ亦時としては都市全體としての宗教的態度を示すことがある。恐らく如何に近代的な都市でも、相續く天災や敵軍の包圍等に會したならば、必ずや其都市としての宗教を發生すべきことは想像するに難くない。況んや原始的な家族部族に至つては、常に其自身の社會的宗教を有することは普遍的の事實であつて、多くはその宗教的活動を以て其社會的機能の最も重要なものとし、之を以て他の一切の社會的生活の統一的要素として居るのである。

第二に社會的宗教の主體としての社會團體は、教會、宗派、講社等の特殊的宗教團體である。即ち之等の團體は本來宗教を目的として成立した團體であるから、それが全體としての活動も直接間接に宗教と關係すること勿論であり、且つそれは本來各人の宗教的類似を基礎として成立した團體として、各人の信念行事は殆んど同一であるのみならず、多くは唯一の宗教的對象に向つて各人は協同的に其宗教的態度を

集中して居る。故に若しそこに何等か全員の利害に關係する共通の動機が發生するならば、忽ちにして團體が全體としての社會的宗教を生ずることは極めて容易である。云ふまでもなく此等の宗教的團體は必ずしも其社會的宗教を營む爲めに成立したものであるのではなく、むしろ唯各人の個人的宗教の協同を目的として成立したものであることは、既に詳述した通りである。然しなから其協同すべき各人の個人的宗教は又其間に全體としての類似があるから、其慾望理想が全體として一の社會的動機として結合するならば、各人の間に容易に統合の意識を生ずるのであつて、従つてそれは又一の社會的宗教となつて來る。故にかゝる團體に於ての單なる個人的宗教の協同は容易に一の社會的宗教と轉化するのであつて、むしろ事實の上では或る宗教的協同活動が、果して單なる個人的宗教の社會的協同であるか、將又全體として一の社會的宗教を成すものであるかは、之を識別すること甚だ困難である。故に本來個人的宗教の協同の爲めに成立した此等の特殊宗教團體は、單なる個人的宗教の社會結合と同時に、又一個の社會的宗教を有し、社會的宗教の主體として働くことが多いのである。例令は各人が罪の救濟を求める宗教が社會的に結合されて一の教會を成したとしても、それは又時として教會全體として全員の救濟を祈る一の社會

的宗教ともなるべく、又一の宗派に在りて各人が自派の隆盛を願ふ心から、宗派全體として之を祈願する團體の宗教が生ずるのである。此外疫病、飢饉、豐作、戰捷等の世間的な動機でもそれが宗教團體の全員に共通な利害として、一の社會的動機として結合される時には單に各人が集りて協同的に其個人的宗教を管むといふより以上に、尙教會や宗派の名に於て營む、全體としての社會的宗教が成立するのである。

尙此外に社會的宗教活動の地盤として、宗教以外の目的を有する特殊の團體を擧げることが出來、又特に社會的宗教活動の爲めに成立する特殊團體の發生も絶無ではない。而て之等は理論的には上に述べた民族的社會や特殊宗教團體と多少區別して論ずる必要もあるが、然しそれは事實に於て餘り顯著なる活動を見ないから、且く之に關する記述は省いて置く。

要するに最初からの所説を一言にして云ふと、宗教の社會的表現には二種の形式がある。一は或る個人的慾望を動機とする個人的宗教活動が、其性質上の類似の爲めに社會的に結合されて何等かの團體的組織を成すものであつて、他の一つは本來一の社會が全體として要求する所の社會的慾望を動機として、社會其自身が營む所の宗教的活動である。而して之等の宗教の社會的活動の地盤又は主體としての社

會團體は、大體上之を一般の民族的社會團體と特殊的宗教團體とに區別するならば、前者に於ては嚴密なる意味の社會的宗教即ち社會自身の宗教が著しく現はれ、後者は主として個人的宗教の社會的協同の爲めに成立して居るが、しかも兩者には共に宗教の社會的表現の二形式が現はれて居るのであつて、其等の社會團體の宗教的活動を考察するには明に此二種の形式を區別して見なければならぬ。多くの學者は彼等が社會現象としての宗教とか、又社會的宗教とか云ふ場合に殆んど此區別を認めて居ない様であるが事實に於て社會的宗教としてのトテミズムと個人的解脱救濟を本位とする教會團體とは、其社會的團結の性質に大なる差異が存するのである。而して又其等を共に宗教の社會的表現として見る場合には、何れも之を個人的宗教の複合體として考へなければならぬのであるが、しかも前者は個人的宗教活動の有機的複合として、個人的宗教の比論を以て説明せるるき更らに複雑なる一實體を成して居り、之に對して後者は單に個人的宗教の集合として、其間に多少の社會的相互關係を保つて居るに過ぎないのである。(完)